

教えられ得るものと学ばれ得るもの

笠 尾 雅 美

I

誰れか優れた人、例えばペリクレスのような人が、その自らの他人にすぐれている所以のものを、ひとに教えることは、果して可能なことなのであろうか。一見して極めて平凡に思われるこの疑問も¹⁾、われわれにとつては、決して容易ではないのである。ギリシヤ人達は古くからこの点について、深い思索を重ねたけれども、それだけにわれわれは、いま求めているかたちで、この問題の解決が得られると考えていいだろうか。いま仮に、多くの人達から優れていると看做される人は、先ず何かの点に於て、すぐれたもの (*ἀρετή*) を有たねばならぬ筈である。しかしながらその人は如何なる点に於て、そうであるのか。つまりその人を優れた人たらしめているものは、一体何であるのか。また、真にその人がすぐれたものを有つていとすれば、それをその人はどこから学んだのであるか。更に少くともその人が、いますぐれた何ものかを有つていとすれば、彼はそのものをひとに教えることが出来るのであるか。ここには、端的にいつて、次のような問題がある。a 何かよきもの (*ἀρετή*) がそこにあらねばならぬが、そのよきものは何であるか。b そのよきものは、少くとも所有されていなければならぬが、その獲得は如何にして可能であつたのか。c いまそのよきものは、ひとに伝授しようと思えば、それを与えることが出来るのであろうか。

ここに、ひとりの大工がいたとする。この人は大工であるから、家を建てるのが、勿論可能でなくてはならない筈である。こま仮にこの人が、世間の期待通り、立派に家を建てるのが出来たとしても、ひとは別に驚くにあたらない。だがし

かし、街を通る誰でもが、家を建てることに堪能であるとは、決して云い得ない。理由は明瞭である。即ち彼は大工ではないからである。けれども、それだけでいいであらうか。つまりある人は、彼が大工であるから家を建てる事が出来、いま他のある人は、彼が大工ではないから家を建て得ない。また家を建て得るからある人は、大工であり、他の人は家を建てる事が出来ないから、大工ではない。しかしながらこのように推論することは、果して当を得ているのであろうか。蓋し問題は、別のところに、あらねばならぬ筈である。

先ず、ある人が大工であるということは、家を建てる事がその人に可能であるということに於て、彼が他の人達から区別されるからに外ならない。家を建て得るものと家を建て得ないもの——大工である人と大工でない人とは、ある点に於て、明かに差異が存在するというわけであつた。して見るといまの場合両者にこのような差異を齎らすある点とは、まさしく家を建てるわざに関する事柄であらねばならない。同様なことが、鍛冶屋についても、また靴屋についても、いわれ得る性質のものだとすると、大工は家を建てるわざに於て、鍛冶屋は鍛冶のわざに於て、靴屋は靴をつくるわざに於て、他から区別されるのである。つまりそれぞれは、それぞれのわざによつて、而もそのわざを所有していることに於て、他からの区別が可能となるのである。もしそうだとすれば、この場合、一般にそれぞれはそれぞれのわざ(技術)に関してのみ、明確に他から区別されるべき存在であることが知られる。従つてここには、技術の存在と技術の所有とが考えられるわけである。このようにして、ある事柄に関する技術 (*τέχνη*)

¹⁾ Plato ; Protagoras 320 B

²⁾ Plato ; Protagoras 319 E-320 B

が、まずわれわれの問題となつて来る。

II

プラトンは、医術・建築術・戦術等を屢々挙げ、それに音楽、ある場合には、弁論術さえも、何か技術の代表的なものとして考えている。同様にアリストテレスも、異つた意味に於てではあるが、これらのものを明かに技術と看做している。それではテクネーとは、如何なるものであろうか。われわれはこの課題を追求する手掛を、アリストテレスに於てよりも、寧ろプラトンのうちに与えられている。

プラトンの「プロタゴラス」によると³⁾、ヒッポクラテスという青年が、プロタゴラスという人物のアテナイ来泊を聞出して、早朝からソクラテスを訪ねて、是非プロタゴラスに引合せてくれと頼みながら問答する次第が見えている。このくだりによると⁴⁾、プロタゴラスという人は、人人から学者(σοφιστής)と呼ばれており、この青年ヒッポクラテスはあるだけの財産を授業料として投じて、このプロタゴラスに弟子入りしたい希望である。しかしそれは学者(σοφιστής)になるためではないのであつて、彼は寧ろ自分を学者として世間に示すことを恥辱と考えるのであるが、教養(παιδεία)のために学ぼうというのである。そしてプロタゴラスから授けられるところのものを、彼は少年時代に音楽や体育の教師から学んだと同様な性質のものであると看做している。而もここで彼は、嘗つて授けられた初等教育以上の何ものかを、この学者から教養のために学ぶことが出来ると思つて信じていることが、語られている⁵⁾。して見ると、ソフィストのプロタゴラスとは、何かを「教えてくれる人」(διδασκαλός)なのであつて、彼は多額の報酬を要求する「職業的教師」(professors or public teachers)である。しかしながら、ヒッポクラテスが、単にこの人に就いて何かを学ぶからといって、全財産をも

投げ出そうとするのは、われわれには諒解し難いことに思われる。既に見られたように、ヒッポクラテスは職業のためではないが、それかといつてまた単なる教養を求めているわけでもないとするれば、彼の真の目的は、どの点にあつたのであろうか。われわれは、ヒッポクラテスについて、次のことを指摘し得る⁶⁾。アテナイでも富裕な大家の出身である彼は、またその素質に於ても、同輩に比して少しも劣らないのであるが、いま志を立てて国家社会に重きをなす大人物たらんと欲しているのであつて、この希望を実現するためには、プロタゴラスの教えを受けるのが一番であると考えて、かくも熱心に弟子になろうと望んでいるわけである。つまりヒッポクラテスによると、ペリクレス時代のアテナイに於ては、ひととは富や家柄や単なる才能だけでは、名を成すわけには行かない。従つて国家有数の人物たらんと欲する者は、自分を傑出させる何ものかを熱心に求めなくてはならないのである。而も彼には、ソフィストのプロタゴラスこそ、まさに自分の希求するものを、授けてくれる教師だと思われたのである。それだからこそ、彼は自分の全財産をも授業料に代えて学ぼうと決心したわけである。しかし果して、Sophistēs が、実際にこのようなものであるかどうかを、われわれはソクラテスと共に、疑うのであるけれども、ヒッポクラテスはこれを信じ、当のプロタゴラス自身もこの点を保証するのである。ヒッポクラテスが、いま青春有為の全精神を託そうとするプロタゴラスとは、一体何者であるのか。寧ろそれよりも、この教師が教えると称し、またこの青年が学ぼうとするところのものとは、果して何であるのか。ヒッポクラテスは、プロタゴラスから学ぶべきこととして、結局のところ巧みに言論する技術というものを考えているのであるが、これはどういう性質のものなのであろうか。これらの点は、未だ一向に明かにはならないのである。

³⁾ Plato ; Protagoras 310 A-311 A

⁴⁾ Plato ; Protagoras 311 E

⁵⁾ plato ; Protagoras 310 A-312 E

⁶⁾ Plato ; Protagoras 316 A

プロタゴラスが自信をもつて語るところによれば、自分は学者(σοφιστής)であり、人間の教育(παιδεία)を受持つものであつて、永年にわたつてこの仕事に従事している⁷⁾。ひとが自分から学ぶことの出来るものは、まさにヒッポクラテスが期待したところのもの——身のためにも、国のためにもよく計る識見——治国済家のわざ(εμβουλία)である⁸⁾。而して、国民の精料たるべき卓越せる国士の教育を約束することこそ、自分が世に問うところのものである⁹⁾。と述べてる。しかも注目すべきことは、「言論に於ても、行為に於ても最も有能有力なる人」とは、ツキジデスが、かのペリクレスについて語つた言葉なのである。このように見て来ると、彼等〔徳の教師と称する者達〕が抱く人間教育の目的乃至理想は、この限り充分高尚・有意義であらねばならない筈である。しかしながら、まさにこの点に於て疑問が生じるのである。抑々いゆる徳の教師とは、精神の糧食を商品として売る者(μαθηματοπωλικός)ではなかつたか。「あたかもオルペウスのそのように、若者をギリシヤ全土から、その言葉を以て魅惑しながら引連れて来た¹⁰⁾」プロタゴラスに、われわれもまた欺かれてはならないのである。すなわち世人の見た Sophistēs は、先に明かにされたように、職業的教師であつたが、単にそれはまた、特に言論の技術(ῥητρικὴ τέχνη)を教授する者(διδασκαλός)に過ぎないとも考えられた。ところで、クセノホン(Xenophōn, 430-355, B.C)の「ソフィスト伝」の中に、「Sophistēs というものは、人を欺くために語り、自己の利益のために書くだけで、何人をも少しも益するところのないものどもであつて、彼等には真の知者は一人もないのである」¹¹⁾と見えている。更にアリストテレスに、次の言葉がある。即ち「実際には存しない見せかけの知識で金儲けをするのが、Sophistēs の業であ

る」¹²⁾と語られている。彼等の本質がクセノホンはともかくとして、アリストテレスが規定したようなものであるとすると、プロタゴラスの標榜するところは、極めて問題である。プラトンはその対話篇で、Sophistēs は、金持の青年を獲得して金儲けをする者であつて、精神の糧食である学問知識を切売りしたり、また自家製造したりする商人なのであるが、他方またその学問知識は見せかけだけの偽物であつて、彼等は自分自身がよく理解していない事柄の模造品を取扱うのに、自分はそれを熟知している者であるかのように、ことさらに偽り装う者である。¹³⁾と規定している。

プロタゴラスの抱負では、彼は純粋な徳の教師であつた筈である。而して国家社会に於て、有為な働を有つような青年を教育するという彼の仕事は、実に言論の技術を教授することによつて、果されるように見えた。彼の云う言論の技術は、少くとも国家的士に適わしい能力を、青年達に約束するものなのであり、従つてこの技術によつて、徳は期待されるのであつて、かかるものは、教え得られ学ばれ得る性質のものなのであつた筈である。いま仮に一步を譲つて、上に挙げた三つの引用を些細に比較することによつても、彼が言論の工夫を主とするものであり、且つそれを教える者であるということは、被うべからざる共通の規定として、われわれに残されるわけである。プロタゴラスはプラトンの云うように、当時の人々をもまたわれわれをも欺いたのであろうか。

Ⅲ

ゴルギアスは、この点を正直に認めて自分の教授するものは、結局のところ弁論の術(ῥητορικὴ)だけであるとする。つまり彼は徳を教えるということについては、約束しなかつたように思われる。それでは彼はすべての徳の教師と称する者達

⁷⁾ Plato ; Protagoras 317 B

⁸⁾ Plato ; Protagoras 318 E-319 A

⁹⁾ Plato ; Protagoras 319 A

¹⁰⁾ Plato ; Protagoras 315 A-B

¹¹⁾ Xenophon ; Cynegetius 13. 8

¹²⁾ Aristoteles ; Sophistici Elenchi I 156 a 21

が、凡そ空虚であることを知っていたのであろうか。プラトンの「ゴルギアス」によると、ゴルギアスは弁論術の専門的知識を有つ者として規定されている¹⁴⁰。では彼を弁論家たらしめている弁論術（*ῥητορικὴ*）というものは、そもそも何であろうか。この点に関して、ゴルギアス自らの挙げた定義によると¹⁴¹、それは法廷や議会などの国民的集会の場に於て、正邪を争う際に、説得する能力を生み出す技術である。端的には弁論術は説得術であつて、この説得力なるものは単に思いこませることであつて、正邪の何であるかの知識を与えることを意味しないものなのである。そして弁論家とは、このような技術を心得ていて、青年達にも教えるものなのである。このように見て来ると、彼等の本質は、先に挙げたプラトンの主要な概念に、かなり接近して来るわけである。特に即座にあらゆる事柄を論じて、誰にも負けをとらないような技術、それがゴルギアスの云う弁論術であり、しかもこのような技術がひとに教えられ得るとすると、主要な二つの規定、即ち言論の技術の存在とその可教性とは、ここにも見られるわけである。

しかしながら徳の教師が弁論家であるとしても、弁論家が直ちに徳の教師ではない。それならば、世人はゴルギアスのような人達を何故に徳の教師とするのであろうか。このことはアリストテレスも指摘するように、「その技能に存せずしてその主眼とするところのもの如何による」¹⁴²のである。既に見られたようにゴルギアスは、徳を授けるという約束はしなかつたのであつて、ただ彼は弁論術を教えると宣言したのである。しかし彼は弁論術を教えるということによつて、実はもつと重大なことを約束したと看做れるべきである。すなわち「ゴルギアス」によれば、弁論術は

人生最高・最善のものを生み出す技術である¹⁴³。それだからひとは、この技術によつて、自分の自由を確保し、他人をも支配し得るのである¹⁴⁴。実にこの技術の所有と使用とは、国家社会に於ける支配的地位の獲得を可能ならしめるものであつて、ひとは如何なる官職にもつかず、また如何なる権力をも必要としないで、国民議会にせよ、陪審法廷にせよ、凡そ国民的集会のあるところ民衆を説得して、自己の意志に従え得るのである¹⁴⁵。この場合、まことに弁論術は、既に政治の技術（*ἡ πολιτικὴ τέχνη*）であつたのである。それだからゴルギアスの目的とするものは、国家社会に於ける支配的地位であり、その約束するところは、人間としても社会の一員としても優れた人物をつくる徳の教授にあつたことは明かである。しかしながら、このことは極めて重大なことを意味する。ここに、ある技術が存在し、この技術はある人によつて教え得られ、従つてひとはそれを学ぶことが可能である。しかもこの技術は、それを有つことによつて、人生最高・最大のものを生み出すところのものなのである。それ故にこの技術を学んで、国家社会に卓越した大人物となることが可能である。少くともプロタゴラス—ゴルギアスは、こう約束するように思われる。果してそうだろうか。もしそうだとすると、徳の教師と称する者達は、すばらしい技術をものにしてゐるわけである。何だか極めて疑わしいように思われる。

彼等の云うように、そんな技術が存在するのであろうか。またそれは「教えられ得るもの」(*τὸ διδασκόμενον*)であり、「学ばれ得るもの」(*τὸ μαθηματικόν*)なのであろうか。どうしてもそれが、われわれには教え得られ、学ばれ得るものであるようには思えない。それは何故であるか。このことの理由を、ソクラテスは、次のように挙げるのであ

¹³⁹ Plato ; Sophistes 24

¹⁴⁰ Plato ; Gorgias 449 A. 449 C. 452 D

¹⁴¹ ibid. 454 B-455 A

¹⁴² Aristototeles ; Saphistici Olenchi

¹⁴³ Plato ; Gorgias 452 D

¹⁴⁴ ibid. 452 E

¹⁴⁵ ibid. 452 E-453 A

る²⁰⁾。その論拠の第一は、すべて教え得られ、学ばれ得る限りの事柄については、それぞれその道の専門家が存在する。例えば国民議会議に於て国事を議する場合にも、建築については建築家が喚ばれ、造船に関しては造船家が招かれるという風に、それぞれの専門家に意見を徴するのであつて、もし専門家として認められないような者が、提案を試みるなら、たといその人が金持だろろうと、貴族だろろうと、門外漢として、運場を命じられる。およそ技術に属する事柄に関しては、すべてこのようである。これに反して、こと国政についての協議に際しては、大工であれ、鍛冶屋であれ、商人も船長も、すべて貴賤貧富・職業の別なく、何人にもひとしく意見の陳明が許される。しかもどこからも学ばず教えた人もないのに、彼等が提案するからという理由で、この人達を誰一人として非難する者もなく、その発言を拒む者もない。これは即ち政治に関しては、特に専門がなく、従つてそれが教えられ得るものでない所以を証明するものなのである。その第二は、アテナイでも最も賢く最も優れた人達が、自らの有つその徳を、自分の子供にさへ附与(παριδιδοῦναι)することが出来ない事実である。例えばペリクレスの如きである。彼は息子を教師の手に適う限り美しくもし、またよくも教育したのであるが、自らがすぐれていた所以のものは、心から伝授を欲したのにもかかわらず、決して教え得なかつたのである。テミストクレス、アリストイデスも同じである。彼等は自身ではよき人でありながら、肉親にせよ、他人にせよ、誰一人をも一層よくは出来なかつたのである。この事実は、とりもなおさず徳が教えられ得るものでないことの証拠を示すものなのである。以上のような理由から、ソクラテスは「徳が人間によつて、人間に附与され得ないものである」²¹⁾と主張したのである。このように徳が教えられ得るものであるとは考えないところのソクラテスに対して、徳の教師達は、徳が教え

られ得るものであるということの根拠を証さなくてはなるまい。

プロタゴラスによれば²²⁾、徳が教えられ得ることの論拠は次の如きものである。プロメテウスは技術的な智慧を火と一緒に、ペパイストスとアテナのところから盗んで来て、人類にこれを与えたのであるが、しかし国家社会を形づくつて生活するために必要な技術の智慧は、ゼウスのところにあつたので、プロメテウスといえども、そこまで忍びこんで、それを盗むことは出来なかつた。そこで最初の人類は、このような国家的な智慧を缺いたために、ほかの技術的な智慧を有つていたにもかかわらず、孤立離散を繰返したのである。なぜなら、他の動物から襲撃されても、彼等は団結して、これと闘う術を相らなかつたからである。つまり戦争術は国家的技術の一部なのであるが、彼等には国家社会的なそれが与えられていなかつたからである。ゼウスはこれを憐んで、ヘルメスを遣して、他の諸技術の智慧が領れているのではなく、正義と畏懼とを根幹とする国家社会的な技術の智慧をば全人類の皆に頒ち与えたのである。このようにプロタゴラスの語るところでは、技術的な徳はそれぞれの専門家に頒れたが、国家的な徳はすべての市民に与えられたというのである。それ故に、技術的な徳が問題になる場合には、専門家だけが協議に与るのが理の当然であり、国家的な徳の討議に際しては、市民の誰にも発言を認めるのが至当の道である。これが理由の第一である。次いでこの国家的な徳は、先天的に具るものでもなく、偶然的に生ずるものでもないのであつて、寧ろそれは教えられ得る性質のものであり、修養(ἐπιμελεία)によつて具わるものなのである。なぜなら、世人は天賦乃至偶然に生ずる缺點(美醜・優劣)に対しては、それを教え徴さないものである。これに反して心算とか修練とか教授とかによつて生ずると考える美点(正義・敬虔)については、これを缺くものがあると、教え

²⁰⁾ Plato ; Protagoras 315-320 B

²¹⁾ Plato ; Protagoras 320 B

²²⁾ Plato ; Protagoras 320 C-327 E

徴すのである。この事実はとりもなおさず国家的な徳が、修養や教授によつて、教えられ得るものであることを証すものである。これが第二の論拠である。更にどうして優れた人達でさえも子供達をよくなし能はないのかの困難な課題の説明として、かりにも国があるべきであり、国民のすべてが具有すべき徳があるとすれば、しかもこれを欠くと追放・徴罰・死刑に処せられるのであるとすれば、先の論拠に基づいても、彼等がその徳を教へもせず、世話もしないということはいふを得ない。また若者は、父孿なり家庭教師なり、体育や音楽の教師なりの手によつて、心身の両面から発達の段階に応じ、あらゆる修練（*επιμελεια*）を積まされているのであつて、躰や訓練により、模倣や習熟により賞罰や徴罰によつて、知らず識らずのうちに徳にまで育てられるのである。同様に市民たるの徳についても、人々は法律が裁判や、その他あらゆる市民的生活によつて、徳へと教化されるのである。それだからひとは皆、それぞれに徳の教師といえるのである²³⁾。プロタゴラスによると、このような観点から、徳は教えられ得るということの論証は、十分に成されたことと云うのである²⁴⁾。しかしながらプロタゴラスのこの魅惑的な論究をもつてしても、徳の可教性に関する問題は、なおわれわれに残されるのである。この点について、ゴルギアスを訪ねよう。なぜなら先に見られたように、彼は弁論術の専門家であり、それ故にひとをも弁論家にすることが出来ると宣言するからである。また、その約束するところは、徳の教授にあつたと看做されるからである。既に知られたように、すべて教え得られ学ばれ得ると考えられるところのものに関しては、それぞれの専門家が存在するのである。例えば国が何か技術的な事柄について、詮衡会を催す場合に於ても、弁論家はそれに与らないのであつて、各詮衡に於いて選ばれる者は、勿論のこと技術の一番優れた者なのである。城壁の築造とか、ドッ

クの建設についての討議に際しても、意見を述べ得るものは弁論家ではなく、それぞれの専門家なのであつて、敵前配置や陣地占領について討議のある場合でも、決して弁論家ではなく、将軍が評定するからである²⁵⁾。技術に関する事柄に属することは、すべてこのようである。この事実の妥当性を、プロタゴラスはもとより、ソクラテスも承認した。想うにこのような見解の成立を許容する根底には、次のような事実が前提されているからである。すなわち技術的な事柄については、それぞれの目的があり、それぞれの働きの対象が独立に存在する。それぞれの働きの対象について学知しているものが、即ちそれぞれの専門家である。それぞれの専門家の内容をなすものは、この限り学ばれ得るものであり、教えられ得るものである。従つて何らかの点で教えられ得るといわれるものは、少くともいま見たような規定を具有するものでなくてはならない筈である。これに反して国家的な徳が問題になる場合には、何人もひとしく意見の陳開が許されるのであつて、この事実は事実として、プロタゴラスには勿論のこと、ソクラテスによつても認承された。なぜなら国家的な徳に関しては、特に専門がないからである。しかし注目すべきは、国家的徳については、特に専門がないというこの事実の承認が、同時に徳の可教性を繞つては、激しい対立の根拠となつたことである。すなわちこの事実を以て、ソクラテスは徳が教えられ得ないことの根拠とし、逆にプロタゴラスは、徳が教えられ得ることの理由として挙げるのである。前者によれば、国家的徳については専門がなく、従つて徳は教えられ得ず、それ故にまた徳の教師も存在しない筈である。他方、後者によれば、それは万人に具有されるべきものであるから、特に専門はないのであつて、それ故にこそ徳は教えられ得るのであり、従つて人は徳の教師である筈である。しかしながらプロタゴラスの既説の見解を前提として、直ちに徳が教えられ得

²³⁾ Plato ; Protagoras 327 E

²⁴⁾ Plato ; Protagoras 328 C

²⁵⁾ Plato ; Gorgias 455 B-C

るものであるという結論に導くことは妥当ではない。なぜなら、このことによつて討議許容の一応の基礎づけは与えられるであろうが、それは決して徳が教えられ得ることの論証とはならないのであつて、これは寧ろそれを否定する原理なのである。また徳は修養や教授によつて具るものであるとしても、われわれは最も優れた人達でさえ、それを教えることの出来なかつた事実を知っている。それだからこそ、このような働きの対象については教えられもせず、またその教師も存在しないと考えるのである。少くともプロタゴラスは、いま挙げた二つの規定を満足せしめるものではないのであつて、この限り彼のいう徳の可教性は立証されない。

この点について、ゴルギアスはどのように解するのであるか。「ゴルギアス」によると、意外にもアテナイのドックも城壁も、それからまた築港も、すべての技術的設備の決定も、それらはみな弁論術によるのである²⁶⁾。つまりこれらを建議して意見を通し、一切を成立せしめたものは、他の棟梁達でも將軍達でもなくて、実に弁論家であるというのである。なぜなら、ゴルギアスの自慢によれば弁論術は、あらゆる性能を自己のもとに一括して有する性質のものなのである。事情が真にそうだとすると、弁論術は他の一切の専門術の上に位して、それらに命令するものでなくてはなるまい。ゴルギアスの答えたところによると²⁷⁾、弁論術の本質は、ひとを説得することにあるのであつて、事物の何であるかを教えることにはないのである。この弁論術を用いることによつて、自分の知らないことを論じても、何も知らない相手に対しては、その道の専門家よりもよく知っているように論議することが出来るから、議論を自己の有利に導くことが可能であり、国家社会に於て、この有力な武器によつて、支配的地位が得られるというのである。このように見て来ると既に事情

は明かである。ゴルギアスは「弁論の技術」が何についてのそれであるかを問われて、直ちに「言論についての」(περί λόγους)と答えているのである²⁸⁾が、しかしながら既に見たように、事柄自体については何も知らないし、また少しも知らうともしないで、ただ言論の工夫のみに意を用い、言葉の魔術を繰ることによつて、自分に都合のよい決定を導きだすために、無知な大衆を説得することを任務とするような手管(κολακεία)が果して真の技術といわれ得るであろうか。単せるかな、ソクラテスは、ゴルギアスの弁論術の技術性を、頭から否定するのである²⁹⁾。しかしながら、弁論術が技術ではないとすると、それは一体何なのか。ソクラテスによると、弁論術は単なる経験・手管(ἐμπειρία)に過ぎないのである³⁰⁾。それでは技術と経験との区別は、どの点にあるのか、また経験と技術とは如何なる関係にあるかが問題となつてくる。

IV

プラトンは技術と経験との区別を、医学と料理法との対比によつて説明している³¹⁾。医術はその取扱う対象の自然の性質や、それが取行う処置の原因根拠を研究していて、そのいづれについても理論的な説明(λόγος)を有つものなのであるけれども、料理法は、どうしたら快楽を与えることが出来るかということの工夫だけに終始するものであり、その目的とするものの本性や原理については、何も研究していないのであつて、それについて理論的な説明をすることが出来ないものである。従つて両者の区別は、ロゴスの有無にあるといえる。また医者も、どうすれば身体のためになるかを考えるけれども、料理人はどうしたら人の気に入るかを度量するのであつて、医者はよきもの(ἀγαθόν)を目的とし、料理人は気に入られ

²⁶⁾ Plato ; Gorgias 456 A, 455 E

²⁷⁾ Plato ; Protagoras 454 E-455 A. 459 B

²⁸⁾ ibid. 449 C. E

²⁹⁾ Plato ; Gorgias 462 C

³⁰⁾ Plato ; Gorgias 465 A

³¹⁾ Plato ; Gorgias 501 A-C

るもの(τέχνη)を目指すものなのである³²⁾。だからしてこの場合、両者の区別は善の目的の有無にあるわけである。それ故に、技術は真に人の"ため"になるもので、ものの本性或原因を研究していて、ロゴスを有し、理論的説明を行うことが出来るものなのであつて、この限り教えられ学ばれ得るところのものである。これに反して、善を目指す、ただ当推量と記憶に終始して、原因の研究を併わず、ロゴスを欠き、理論的説明を加えることが出来ないで、この限り、教えられ得ないものが経験である。従つてそれは手練であり、練習と苦勞によつて自得されるものなのである。(弁論術はかくて経験に過ぎない。)

このようにプラトンは、経験と技術とを区別して、これら両者を対立的に見ようとするのであるが、これに反してポロスは、経験を技術の基礎と看做して、両者の間に連続性を認めるのである。ポロスは「経験からは技術が発見されるが、無経験(ἀπειρία)からは偶然(τύχη)しか生れない³³⁾」といつている³³⁾。アリストテレスはポロスのこの立場に賛成しながら、経験に技術や科学の基礎を見出して、両者の連続関係を容認する立場に根拠を与えるもののように思われる。すなわちアリストテレスによれば³⁴⁾、動物はいづれも感覚(αἴσθησις)をもつてるのであるが、その感覚からは一部の動物に於ては記憶(μνήμη)が生じて来る。そして人間にあつては、この記憶から更に経験(ἐμπειρία)が生れて来る。すなわち同じ事柄についての沢山の記憶は一つの経験としてまとめられるのである。そしてこの経験から人間にあつては、科学と技術とが結果として来るのである。すなわち技術の生ずるのは、経験に含まれている多くの場合を思い浮べることによつて一つの普遍的な把握が、類例についてつくられるとき、ひとつの技術が生れるのである。例えばカルリウスがこれこれの病氣にかかつていた際には、これこ

れの薬が利いた。またソクラテスの場合もそうだったし、そのほかの多くの人達の場合についても、それぞれそうにだつたということの把握は、未だ経験に属することである。しかしすべてこれこれという風に、一つの型に入れられる人達が、これこれの病氣にかかつていた際にはという風に把握すること、例えば、粘液質の人が、熱病にかかつている場合には、これこれの薬がよく利いたという風に把握することは既に技術の領分に属することである。このようにアリストテレスに於ては、感覚から記憶、記憶から経験、経験から技術へと、このように連続一脈の關係と、相互關聯の立場とが考えられているのである。しかしながらわれわれは、これらの区別と相互關聯の限界とに困難を感じなければならないのである。すなわち科学や技術が感覚から出発するとしても、それらの過程は必ずしも自明ではないのである。この点について彼の語るところによると³⁵⁾、すべての動物には生れつき事物を認識する能力が与えられている。それがつまり感覚である。しかしながら、感覚は存するが、感覚の残存ということは必ずしもすべての動物に許されているわけではなく、またすべての感覚対象についてこのような残存が可能なのでもない。しかしそのようなことが許され、それが屢々繰返されると、現在感覚していない事物についても、心(ψυχή)のうちに認識が成立し得ることになる。そうして感覚から記憶が生じて来るのであるが、そこから他の可能性が出て来る。つまり同じ事柄についての記憶がたびたび繰返されるとそこに経験が生じて来る。というのは数多くの記憶が一つの経験を成すからである。更に経験からむしろ心のうちにその全体の固定された普遍的なものから(あらゆる多なるものの中に一なる同一性が存するところの多と並んで一なるものから)生成に関しては技術が生じ、存在に関しては科学が生じるのである。このようにして

³²⁾ Plato ; Gorgias 465 A ; 500 B ; 504 D

³³⁾ Plato ; Gorgias 448 C ; 462 B

Aristoteles, Metaphysica (981 a 4)

³⁴⁾ Aristoteles, Metaphysica (980 a 21-981 a 12)

³⁵⁾ Aristoteles, Analytica Posteriora 99 b 35-100 a 14

経験は科学や技術の基礎をなすのである。これらの知的性能は既成の形をとって内在するものでもなければ、況んや他の一層高い認識から出発するものでもないのであつて、むしろそれは感覚から生じたものである。恰もそれは戦場に於て全軍総崩れとなつたとき、先ず一人が踏み止まつて防戦し、次いで他の一人が、そうして喰ひ止めながら、遂に最初の隊形が回復されるに至ると同様に心はもともとこのような過程を受容するように出て来ている。すなわち幾つかの理論的に未割な個々のものの一つが抵抗しているとき、先ず最初の普遍的なものが心のうちに足場をもつようになるとそこから再びその上に足場が築かれて行つて、遂に不可分な真に普遍的なものが確立されるに至るまで、尚一層高い普遍化えの段階が続けられ、此ようにして最高の普遍が得られることになる。このようにアリストテレスによれば、経験はそのまま技術の基礎であり、感覚は既に科学えの第一歩をなしているのである。して見れば、この点に於て彼は経験主義的であると見られなくてはなるまい。

しかしながらわれわれは、以上の説明によつて経験が技術や科学の基礎をなすことを知つたのであるが、そのことによつて新たな課題に当面してはならなくなる。つまりアリストテレスが感覚から科学えの順序の上に、科学や技術はそれを基礎として成立するものなのであると看做すことに於て、同時に人間はこの過程によつて、教わり学ぶものなのであるということを説くからである。しかしながらアリストテレスに於ては、単純に経験主義的立場のみが考えられているのではない。この点に関して彼によれば³⁶⁾、或る事実の原因をまさにその事実の原因として知つているとき、われわれは附けたり的にはなく、全く端的にその事実を知つているのである。学的に認識するということは、根本的で直接的な前提原理を認識しているのでなくては不可能である。しかしながらこうした直接的なものの認識については、それが果して論証的認識と同じものであるか、それともそのようなものでないかが問われねばならないが、

それよりも寧ろこうした認識性能が本有的でなくわれわれに生じて来るものなのであるか、それとも本有的ではあるが、気づかれただけなのであるかが問題である。しかしながら、それらは共に不可能である。いま本有的であるとするのは不合理である。なぜなら、われわれは、学的認識よりも精確な認識をもちながらそれに気づかないということになるからであり、また生後に獲得したものであつて、前から有つていたのでないとするとき、どうして以前にもつていなかった知識によつて、認識することが出来るのであろうかということになるからである。それ故に明かに、われわれがそうした認識能力を生れつき有つていないことは不可能であり、それかと云つて何も知らず何らのそうした性能をも有たないで、しかもそれらがわれわれに生じて来るということとはあり得ないのである。そうだとすると必然にわれわれは、ある種の未だ明確さの度に於ては、それ程に達していないところの能力 (*δύναμις*) を有つていないとはならない。実にこのような能力—可能性を指定することによつて、アリストテレスは経験的自然主義者達の古い難問を克服し、更にプフトンに於ける先験論的困難 (*ἀναύρησις*) をも取除くものであるように思われる。いづれにしても、この可能性の原理を規定することによつて、感覚から科学えの連続的発展の過程は、その説明を得られるのである。しかしながらこのことによつて問題は解決されないのである。先に見られたように明かに根本前提は帰納の道によつて、われわれに知られるものなのである。すなわちわれわれは、科学が最初に前提しなければならなかつたところのものを、もはや論証することは出来ないものであつて、われわれはそれを帰納法によつて知らなければならぬ。しかしながら、成程それらの前提は帰納法によつて知られるけれども、しかしその真実性はもはや帰納法によつては、決して保証され得ないのであつて、そのためにはアリストテレスに於ても知性の直観的把握を別に考えねばならなかつたのである³⁷⁾。根本的で直接的な前

³⁶⁾ Aristoteles, *Analytica Posteriora* 99 b 20-99 b 35

³⁷⁾ Aristoteles, *Analytica Posteriora* 100 a 14-100 b 15

提原理の認識には直知 (*vous*) が働かなくてはならないとするアリストテレスを、われわれはもはや単純に経験論者と看做すことは出来ないのであつて、その非連続の面に括目すべきである。既に見られたようにアリストテレスに於ても、経験は技術の生じて来るところのものであつたが、単なる経験が技術になるためには、何か普遍的把握を媒介として、与えられた経験を超出しなければならぬものなのであつた³⁹⁾。すなわち連続発展の見地に立つアリストテレスに於ても経験と技術とは明確に区別されているのであつて、先に見た非連続の面は、記憶と経験、経験と記憶との関係に於ても、また考えられなくてはならないものなのではないだろうか。ところでプラトンは、ある場合には³⁹⁾、ロゴスの有無だけで技術と経験とを区別するのであるが、ロゴスの有無はアリストテレスに於ても両者を区別する決定的な原理となつてゐる。アリストテレスは経験と技術との区別を述べるにあつて、⁴⁰⁾ 実際家と理論家との対比によつて、これを説明している。それによると技術は自らの対象とするもののロゴスを把握し、その原因と理由とを認識しているものなのであるが、経験はその対象とするものの原因も根拠も知らないのであつて、ロゴスを有さないものである。それ故に技術は、経験を媒介として得られるものなのではあるが、一度普遍的把握として成立すると、もはや経験を通さずともロゴスに託され、学問に結びついて伝達され得る公共的なものとなるのである。これに反して経験は、ロゴスを欠きあくまでも個々特殊なものであり、理論的説明をなし得ず、従つて教え得られないところのものである。このように経験に任せ、ロゴスを排除するならば、われわれはすべてを初めから学ばなくてはならないのであつて、人類の進歩は期待されず社会的動物としての人間性は否定されねばならない。経験がロゴスによつて形式化される時、それは既に技術となるのである。このようにロゴスの有無は教育の立場からも決定的意義をもつもの

であることを重ねて知らねばならないである。

しかしながらわれわれは、技術と経験との異別を追求すべきである。既に見られたようにプラトンに於ては、単なる経験は当推量・無計算に終始し、それは練習とか苦勞とかによつて得られるものであつた。従つて技術と経験との区別を考える場合には、経験を、練習を積んだり苦勞を重ねて得られるもの (*τηβησις*) と看做して、これを技術と対立させて考えるべきである。練習や手加減や熟練によつて得られるものは技能であつて、多年の修養と練磨とを必要とするものである。従つてその内容を、ひとに教えることは出来ないのであつて、ひとびとはそれを練習を積み、苦勞を重ねることによつて学ばねばならないのである。このように技能は、自ら身につけなければならないところの個人的特殊なものなのであるが、プラトンのいう技術は技能ではなく、個人的なものを超えた公共的・客観的なものである。このように経験は技術から区別されるのである。しかしながら経験・技能に於ても順序を追つた管理指導が試みられるのである。例えば芸術では、ひとはロゴスを媒介とせず理論的な理解に訴えることなしにでも、感覚を訓練し手法を做ね、練習を積むことによつて、知らず識らずに会得するものなのである。訓育や徳育にもこの方法によるものがある。プロタゴラスが挙げた徳の可教性の第三の原理は、まさにこのことを意味するのであろうが、この場合一般に理論的説明が不可能であるから、普通の学問のようにそれは、学んだり教えたりすることが出来ないのである。その内容が直接ロゴスに訴えて教えられなくても、ある種の方法に従つて習い覚えられような組織を有つものであれば、その限り教育可能なものである。しかしこの方法には理論的な反省を加えて技術化する余地があるのであつて、教育の問題として技術から区別された純粹の領域を問う場合には、すべての教育可能な部分を取除いて、真に個人的な自得の領域を、われわれは考えなくてはなるまい。(分載にて未完)

³⁹⁾ Aristoteles, *Metaphysica* 981 a 1-3

³⁹⁾ Plato, *Philebus* 51 E

⁴⁰⁾ Aristoteles, *Metaphysica* 981 a 12-981 b 13